

## 会議等結果報告書

会議区分	<u>会議</u> <del>・打合せ</del> <del>・協議</del>	文書番号	—
		決裁期日	平成27年 6月24日
名称	平成27年度第1回未来創生委員会		
日時	平成27年6月18日 <u>午前</u> ・午後 10時00分～12時30分		
場所	安平町役場早来庁舎（第2会議室）		
出席者	安平町 町長（企画財政課）木林課長、岡主幹 北海道 胆振総合振興局地域政策部戦略策定支援担当部長 高見芳彦氏（随行1名） 委員 未来創生委員11名（瀬田川委員、川崎委員、大館委員の3名が欠席）		
会議概要	<p><b>1 開会（進行：木林企画財政課長）</b> ◇委員14名に対して11名出席により委員会が成立していることを宣言</p> <p><b>2 委嘱状交付</b> ◇欠席者3名を除く11名に対して委嘱状を交付</p> <p><b>3 町長挨拶（瀧町長）</b> ◇不祥事に対するお詫び ◇日本が世界に先駆け超高齢社会と人口減少社会に突入 ◇これを受けて昨年12月に国では「まち・ひと・しごと創生総合戦略」を閣議決定し、東京一極集中の是正、結婚から子育てまでの連動した支援、地方公共団体に対する新型交付金の措置がなされる予定 ◇安平町では過去より人口減少対策が喫緊の課題であり政策展開 ◇国の方針と連動し人口減少対策に取り組むべきと考えている。 ◇この地域を、未来に引き継ぐため、10年後・20年後を見据えた政策を展開する必要がある。 ◇未来創生委員会は、直面する安平町の少子高齢化・人口減少問題に対応するための2つの長期的計画（総合戦略及び総合計画）の策定に対して意見をいただくもの。 ◇2年間という長い期間となり、多様なアイデアをいただきたい。</p> <p><b>4 安平町未来創生委員会委員および外部有識者の紹介</b> ◇事務局にて紹介し、それぞれ自己紹介</p> <p><b>5 議事</b></p> <p>(1) 委員長・副委員長の互選について ◇委員長：小林正道様 副委員長：西村次郎様にそれぞれ決定</p> <p>(2) 安平町未来創生委員会の役割について（説明：岡企画財政課主幹）（P2～P5） ◇「第2次安平町総合計画」と「安平町まち・ひと・しごと創生総合戦略」という2つの計画の策定・見直し・進行管理に対して意見を述べるのが役割 ◇委員構成は14名。（検討が必要となる目標ごとに各分野から選任） ◇委員とは別に外部有識者を依頼。（プロの意見） ◇来年3月までに4回の会議を開催予定としているが、個別会議等で増える場合あり</p>		

(3) (仮称)安平町まち・ひと・しごと創生総合戦略の策定②に係る基本的考え方について (P7-P11)

- ◇国では現在の推計で2060年に約8,700万人まで減少すると予想されている人口を、1億人程度確保することを目標に総合戦略を策定
- ◇地方公共団体に対しても同様に、総合戦略を策定するよう要請している。
- ◇上記に基づき、平成27年度中に「安平町まち・ひと・しごと創生総合戦略」を策定しようとするもの。
- ◇スケジュールについてはP6参照

(4) 第2次安平町総合計画の策定に係る基本的考え方について (説明:岡企画財政課主幹) (P12)

- ◇合併に伴い策定した第1次安平町総合計画は平成28年度を持って終了。
- ◇平成29年から10年間を計画期間とする第2次安平町総合計画を策定する。
- ◇詳細については次回以降の会議において詳しく説明する。

(5) 安平町の人口の現状分析について (説明:岡企画財政課主幹) (P13-P29)

- ◇平成26年5月に日本創成会議が発表した「消滅可能性都市」⇒国民に衝撃
- ◇3段階ある人口減少において安平町は「第2段階」(若年減少、老年維持・微減)
- ◇昭和35年以降継続して人口減少が進んでいるが、過去20年を切り取ると平成7年から平成12年くらいまで、合併前の旧両町で人口減少に歯止めがかかっている期間がある。(ここにヒントがあるのではないかという仮説)(P19資料も参照)
- ◇現在は自然増減、社会増減ともに減少しておりダブルパンチの状態
- ◇特に社会増減の推移として、合併後の過去8年間で転入-転出差が▲325人であるが、その96%は20代の若者と70歳以降の高齢者
- ◇人口ピラミッドのとおり、団塊の世代といわれる年代の人口が極めて多く、20代から30代の世代が極端に少ない「いびつな人口構造」である。(P22)
- ◇更に追分地区の高齢化は深刻であり、全体の高い高齢化率を新興住宅街で下げている現状(P23)
- ◇1人の女性が生涯に産むと予測される子どもの数の平均数である「合計特殊出生率」も低く、かつ、出生数も減少傾向にある。(P24)
- ◇日本創成会議が提唱する20-39歳までの女性人口も減少が予想され、出生率を工場させても、子どもの数が増加しないおそれがある。(P24)
- ◇悲観的な想定ばかりではない。毎日1800人程度の方が町内企業へ通勤している。
- ◇町内に住み、町外へ通勤している数も多く、何かのきっかけがあれば、町外からの通勤者を定住させることが可能なのではないか。
- ◇これらをまとめると、①死亡者は減らせない。②出生数の増加は可能性がある。③20-24代の若者の転出抑制は困難 ④25-29代の転出抑制は子育て支援等で可能性がある。⑤高齢者の転出抑制は生活不安を解消することで可能。⑥全世代の転入者の増加は近隣市町の住民を筆頭ターゲットとすることで可能性がある。(P28)
- ◇こうした考えに基づき、安平町としての基本目標を設定(P29)

委員の皆様のご意見

(事務局) せっかくの機会なので、P13で示している、「移住・定住対策ではなく、現在居住する町民のサービス充実を重視すること。」という選択肢①か、「移住定住策を積極的に行う」という選択肢②かについて、安平町としての選択肢はいずれなのか皆さんに意見を伺いたい。

(福田委員)

- ・選択肢①と選択肢②のどちらとかではなく、両方とも必要。
- ・選択②はもちろんだが、住民サービスの充実がないと、町外に住んでいる父母を安平町へ呼び寄せることができない。(①と②の両輪で取り組むべき)
- ・分譲地を造成することで一時的に人は増えているが、その後は減っており、分譲地を購入する以外の世帯が転出している。安平町に残ってもらうための住民サービスが不足していると考え。
- ・P28で「都会に住む子ども達が独居となった父・母の生活が心配だという不安を取り除く政策展開が必要」とあるが、都会への転居している現状を、逆に親のいる安平町へ転入させることができないか考えられないか。
- ・今、安平町に住む札幌など近隣都市出身者の若い方が、実家に戻ってしまうという実例についても触れておく必要があるのではないか。
- ・若い方で安平町に住んでいる方で、この先安平町に住み続けてようとしているのか、定年後転出しようとしているのかなど、様々な人の意見を聞いてみたいところ。

(田中委員)

- ・退職後に愛知から移住。
- ・選択肢①と②という部分で、②の書きぶりは競争となっており、こちらが榮えれば隣が萎むという表現に違和感。(表現方法に気をつけるべき)
- ・ただ、基本的には②の選択肢だと感じている。

[質問事項] P20の図9で平成24年に極めて多くの若者が転出しているが理由は何か？

⇒ 進学・就職に伴う転出者が多かったという理由

(佐々木委員)

- ・選択肢①と②ともに重要
- ・自分もUターン。地域活動をさせていただいている。
- ・そこで住んでいる人たちが気持ちよく過ごせるようなまちづくりが人口減少対策では重要。
- ・P28で記載の「20～24歳の転出抑制は可能か」というところの、ふるさと教育やUターンは必要
- ・「安全安心に暮らせる町」ということでは、住むには医療機関の有無がポイント。

(山口委員)

- ・P28に「首都圏に一番近い北海道のいなか街」と地域性を捉えたキャッチフレーズ。
- ・20年近く前に札幌から移住した理由は、利便性の良さ。
- ・今住む人の目線より、外から来た人の目線が必要。
- ・そのような意味では、お試し暮らしを経て遠浅でペンション経営で成功されている、委員の白川さんの体験談などは大変参考になると思う。

[質問事項] オブザーバーで道銀などいるが、本日の資料にはオブザーバーの意見が反映されているのか？こういったプロの意見反映が必要と考える。

⇒ 本日の資料は、町で作成しており、オブザーバーの意見は入っていない。プロの目線は必要であり、委員会を通じて、アドバイスや助言をもらうものと考えている。

14人いると、意見も多くまとまらないので、次回以降の進め方は今後考える。

(白川委員)

- ・東京から移住し、遠浅の駅前でペンションの開業を決意した際、近所の商店・住民の方から、全員から「わざわざここに何を求めてくるのか」「やめた方がいい」とアドバイスいただいた。
- ・自分としては、空港に近い利便性の良さ、その後すぐに牧歌的な風景が広がるというのは日本でも他になく、魅力を感じた。
- ・無人駅という「たそがれた光景」も、田舎という風景に溶け込んだ魅力である。
- ・本州から来られるお客様にとっては、都会で得られない刺激的な風景は、何も無い風景なのかもしれない。
- ・選択肢①は長年かけて培うものであり重要としつつ、喫緊の課題である選択肢②を考えたときに、客観的なデータをみると、安平町にはまだまだ人を呼び寄せる力がある。

(6) 安平町の人口減少問題に対応した施策の方向性について(説明：岡企画財政課主幹) (P30)

- ◇安平町が人口減少対策を行って人口増に転じることは極めて難しい。
- ◇しかし、人口構造を変化させることによって、人口は減りながらも、地域活力を継承していくことは可能かもしれない。
- ◇そのためには、出生率の向上と子育て世代の転入促進が不可欠。
- ◇最終的には、「子育て世代」に選ばれる町、高齢者を含めた「安全・安心に生き続けることができる町」という部分をテーマとしていくことが必要と考えている
- ◇このような方向性で良いか確認したい。

(西村委員)

- ・私は中高年世代であり、医療・福祉・介護の充実は求めているが、説明あった「子育て世代に選ばれる町」というコンセプトに疑問は浮かばない。

(佐々木委員)

- ・政策づくりにあっては、みんなで内容を検討していくことが重要であると考えている。

(福田委員)

- ・中高年世代と子ども達が接する機会をたくさん作ることで、地域の活力や安心・安全なまちづくりに寄与するのではないかと。

(山口委員)

- ・P29の基本目標の②で安全・安心に生き続けられるまちづくりの項目に、「将来の不安を取り除く」という言葉を謳う必要がある。
- ・今の若い方たちは、昔の人とは違って個人のスキルアップ・楽しさの追及の仕方が大変上手。楽しさがなければ何事も続かない。単純だが「楽しいまちづくり」ということもテーマに入れる必要があるのではないかと。

■最後、皆さんから「子育て世代に選ばれる町」になるために、何が必要か、ご発言いただいた。(別添1枚ものの資料)

(島田委員)

- ・「人口を増加させること」と「企業を誘致すること」は鶏と卵の関係

- ・地域に働く人がいなければ企業は入らず、企業がなければ人は町に来ない。
- ・誘致企業会の観点から、子育て世代が増えれば、子育て終了後のパート従業員の確保に大きく寄与。
- ・子育て世代の転入増加策の方向性に賛成。

#### (井坂委員)

- ・町内の住宅ローンの借入れ状況であるが、ご承知のとおり、町内で現在新築住宅の建設はほとんど見られない。
- ・しかし、支店において新築住宅ローンの取扱いがないわけではない。
- ・これは、町内で働いている方が、お子さんも大きくなり、町外に家を建てられているという実態があるということの意味する。
- ・新築需要を、町内で選択させられないか。それを検討していきたいと考える。

#### (白川委員)

- ・子育て世代人口の増の観点から考えれば、インフラ整備が重要だと感じる。
- ・遠浅は苫小牧・千歳で様々な用事が済ませられる利便性の良さがある。
- ・住んでいく上で必要なインフラ整備、美観整備、都市間ルート・地域間ルートなど、当たり前に必要な整備を行うだけで、「自然豊かで何も無いところに住みたい」という感性を持つ方にとっては住み良い町になると思う。

#### (添谷委員)

- ・ド田舎という部分で、車が無ければ生活しにくい町であることは確か。
- ・そうした面では、通勤バスなど交通インフラの整備がなければ、現役世代の方（子育て世代の方）の転入促進は非常に難しいと感じる。

#### (田中委員)

- ・安平町に毎日通勤に来ている方が1000人を超えているという実態に驚いている。  
(多いという驚き)
- ・一番定住策で重要なことは、自分は雇用だと思っている。
- ・若い方が元気に楽しく住み続ける上での最も基本となるもの。
- ・新たな産業、起業のムーブメントが必要。
- ・地域に出てきている芽（菜の花など）に対し、町がいかに支援できるか、盛り上げていけるかにかかっていると思う。
- ・次に、この町は本当に農産物が豊かである。しかし、手に入るはずなのに千歳まで買いに行く。これはもったいない。
- ・地域内消費循環を目指すべきかと思う。
- ・最後に、北海道に移住し、冬季間の燃料代の高さには驚いている。
- ・安平町は太陽光発電もあるが、地域還元できるような、そんなシステムを考えることはできないのだろうかと思う。

#### (山口委員)

- ・交通インフラ、医療関係、スポーツ環境、これら全ての充実を望むが、これらが満たされれば黙っていても人はやってくる。
- ・その中でも交通インフラの整備は重要とは認識。
- ・ただ、できるものから、進めていく。あまり大きく手を広げず、ピンポイントに実施していくべき。
- ・とにかく、安平町のイメージを向上させることから始めるのが重要

(芳賀委員)

- ・中学生の子どもを持つ母親として、今後の子どもの通学時の周辺都市への利便性の悪さを解消できないかという思いがある。
- ・実家が安平地区であるが、安平や遠浅に住む子どもは遊ぶ場所もなく、早来市街地へ遊びに来る手段もない。仕方なく家の中に一人でいる子が多いと聞く。
- ・地域内格差というのは解消するべきではないか。

6 その他

■次回の会議については、分野ごとに分けて実施するイメージであることを打診

(北海道)

- ・北海道も同じように戦略を策定しているが、大きな戦略となる。人口減少対策では各地域の総合戦略が重要となってくる。
- ・安平町は、全道地域から見ても、うらやましく見られるほど、様々なポテンシャルを持っている。これらを活かすためにも、皆さんで十分に議論いただきたいと感じている。
- ・知事も人口減少対策を最重要課題と捉え、史上初の4期目の道政を担っている。
- ・今、全道どこの自治体でも同じような議論をしている。今後も議論を深めてもらいたいと考えている。
- ・道として、他の自治体でこのようなことを行っているであるとか、情報提供に努めたい。

終了 12:25

## 会議等結果報告書（子育て世代の委員のみ）

会議区分	会議	<del>・打合せ</del>	<del>・協議</del>	文書番号	—
				決裁期日	—
名称	平成27年度第1回未来創生委員会（追加実施）				
日時	平成27年7月3日 午前・午後 10時00分～12時30分				
場所	安平町役場早来庁舎（中会議室）				
出席者	委員 未来創生委員3名（瀬田川委員、川崎委員、芳賀委員）				
	<p>（協議内容の要旨のみ記載します）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・親の自立促進が重要と感じている。</li> <li>・子育て支援策については、理不尽な内容を減らせば良い（追分地区では第一子が保育園に通っていて第二子を妊娠し育児休業した場合、その第一子は保育園から幼稚園に変わらなければならないというのは、あまりにも理不尽な気がする）【別途確認】</li> <li>・安平町の小中学校は、部活動や教育について、子どもの数が少ないため選択肢が非常に少ない現状にある。</li> <li>・中学生は塾へ通うが交通が不便であり、親の送迎が必要（ハンディキャップ）</li> <li>・特に安平と遠浅の子どもは、早来中学校の部活へ行くことも難しい（デマンドバスなどの縦循環など支援検討が必要ではないか）</li> <li>・秋田では3世代同居という環境とともに、子どもの自宅での勉強の習慣化が文化として受け継がれており、日本有数の学力を実現している。</li> <li>・子育て世代として移住したが、場所の選定として土地が安かったことはあるが、周りの自然環境と地理的優位性で選んだ。日常生活について、町の中で全てを済ませる考えにはない。（札幌市や千歳市に近いことは大きな魅力）</li> <li>・子育て世代には、最初から住宅建設というのはハードルが高い。よって、空き家が増えている現状から、例えば町が空き家を買って、リフォームし、子育て支援住宅として仮住まいさせることもあって良いと思う）</li> <li>・追分地区はいわゆるグレーゾーンの子が多い。義務教育が終了する中学卒業後の生活については支援する必要があると思う。</li> <li>・追分高等学校の特色について、仕事につながる学校となることが、最も重要な特色のように感じる。</li> </ul>				